
詩歌・小説の中のはきもの（第2回）

大塚製靴株式会社社友 渡 辺 陸

15 そのとき、彼女は「おや、と思った。それは並んだ二人の人間の足であった。一人は女で赤い靴を穿いていた。脚はかなり恰好が好い。もう一人は男で灰色のズボンの下に黒い靴が見えた。黒い靴が一しかし、その片方が靴の側面を床に着けて一つまり、靴の裏側を外に向けて、横倒しにした恰好になっていた。

小沼 丹

★『黒いハンカチ』の中の1編「靴」から。横倒しの靴とは尋常ではないが、推理小説だからその理由は記すことはできない。大勢の人が通る道端で靴だけ見ていると、実際不思議な靴がある。先日、黒と茶、左右色違いの靴を見た。40代の女性だったが、違和感がなかったので、もしかしてファッションなのか知らず、しばらく後を付いて行ってしまった。

16 国軍を率いる黒木 乃木大将等の
軍靴の寸法いただきし父
仲田道子

★『夾竹桃』（昭和49年刊）から。今年は日露戦争百周年。大学教授夫人だった作者の父秋葉信太郎は終生靴業に従事した。詩歌には、靴業に携わった父親が余り登場しない。童話作家のアンデルセン、お堅いと

ころでは〈鋼鉄の人〉スターリンの父親が靴屋だったことは有名。うらやましくも洋画壇には、靴職人である父親の作業する姿を描きつづける見一真理子という画家がいる。

17 靴はなぜ衰れなのだろうか。

あまりにもきちんと、あまりにも整然と、人間の足の機能に合わせ過ぎているところが衰れなのだ。…

革靴はピカピカ光っているところも衰れだ。 東海林さだお

★『明るいくよくよ教』から。ここまで靴に感情移入している人がいる。靴を単に生活の糧を稼ぐ「モノ」として理解し、デザインをおこし、製造販売していたら、それも「衰れ」なことだ。購入して履いて下さる人が単なる「はきもの」としか考えないとしたら、買われた靴も衰れである。

18 おとなの 疲れた靴ばかりの
ならば玄関に

小さな靴は おいてある

花を飾るより ずっと明るい 高田敏子

★『むらさきの花』から「小さな靴」の一節。忘れて行って2か月ほど経った満2歳

になる子の、もう合わなくなってしまった靴に、詩人は感興をそそられた。くたびれた大人の靴が鼓舞されているのだ。「ハトがきて ぼくの赤いブーツに せつぶんした ハトの足も赤 ブーツの色とおんなじ」(赤いブーツ)という短い作品もある。作者の二女喜佐はシューデザイナーでエッセイスト。

19 雪沓や己れ作って己れはく
岩谷山梔子^{いわやくちなし}
自がつくりし藁の草履の足ざわり
ほとほと愛し道に行きつつ
前田夕暮

★小学生のとき、通学に履く草履は自分で編んだ。稚拙な造りでは往復8キロ持たないので、なるべく手に履かせて裸足で歩いた。梅雨時から晩秋までどんなときに履物を履いたのか、どうしても思い出せない。裸足が常態だったのだ。雪道を鼻緒が切れて足袋はだしで歩いたこともある。貧しい時代だったが自分で自分の履物を編む気分は結構豊かなものだった。晩年のトルストイは若いときの贅沢三昧を反省して自分で靴を縫ったという。

20 「おい、長、靴だ」
朝買ったのは、もう誰かにやってしまったのだ。はいっ、と出す。夕方になると、またまた靴を買いにくる。
仕事の報告にきた社員の足元を、ちら、と見て、
「ちょっとこれをはいてみる」
と自分の靴を脱いでしまっているのだった。
上前淳一郎

★『舶来屋一代』から。終戦直後、のちに電通となる貧乏会社の社長になったばかりの吉田秀雄とサンモトヤマの茂登山長市郎のやりとり。品揃えを認めてくれた顧客に、感服できるのは商売冥利につきる。「売ってやる」という横柄な時代があったが「買ってやる」時代も感心しない。品物とそのやりとりの内に人間がいるのだ。

21 ロシア人というのは大体が巨大である。ヤクーツクの靴屋に行っておどろいたのだが一番大きいブーツが42センチだった。以下1センチきざみに22センチまである。ぼくの27センチというサイズはこの国では真ん中から小さい方に属しているのである。 椎名 誠

★『シベリア追跡』から。外国の靴会社と販売提携すると、日本人に合わせた小さくて足幅の広い靴を特注し、輸入する。一度、陥入爪になったとき、「F」フィッティングの靴を取り寄せて履いたところ、ブランドの評判を落とすから、そんな航空母艦みたいな靴を履いて得意先を回らないで欲しいと上司に哀願された。

22 外見だけで男の良し悪しを見抜くのは、ほぼ不可能に近い。…だいじょうぶ。靴がある。靴は、男性が自由に自己表現できる数少ないファッション・アイテムの一つ。
キャスリーン・アイズマン

★『靴で男を見分ける法』から。モカシンを履く男性はトレンドより質を重んじるから、付き合うときはシンプルを心がけよ、と著者はいう。女性は男性の、男性は女性

の靴に注意を払ってもらえれば、靴はもっと洗練されるに違いない。

23 米軍が上陸してからの4日の山中の逃避行で、「植物」たる靴底は「動物」たる上皮と永遠の別れを告げた。我々より1週間長く山中を彷徨した後、露営地に到達した別の隊の兵士が、既に靴を穿き潰し、襪を足首に巻いて歩いているのを見て、我々の靴に対する執着は固定観念となった。 大岡昇平

★『靴の話』から。フィリッピン戦線で支給されたゴム底鮫皮の軍靴、水がよく染みたという。物資の乏しい日本が資源大国アメリカと戦ったことすら知らない世代がいる、今のような時代こそ、こんな事実をしっかりと記憶しておかなくてはならない。人の命を左右した靴は、多くの戦記に登場する。ある意味で銃砲よりも大切なものだったのである。

24 NHKの野瀬アナウンサーが、国技館から中継放送をしている時、解説の玉の海さんに、大内山という力士の足が大きいという話をすると、玉の海さんがいった。
「そうそう、あの人の靴の中で、ネコが9匹子を生んだ位ですよ」

戸板康二

★『ちょっといい話』から。足を細く小さく見せるために苦労している人が多い。行きつくところは、外反拇趾・ハンマートウなどの病気である。靴を買うときに、足を小さく、可愛くみせる究極は中国の奇習纏足てんそくだということを思い出してもらいたい。

大内山は取り口も人柄もとてもおおらかな関取で、足を小さく見せようなどと生涯一度も考えたことはなかったにちがいない。

25 白い靴一つ仕上げて人なみに
方代も春を待っているなり
ゆくところ迄ゆく覚悟あり
けものの皮にしめりをくるる
山崎方代やまざきほうだい

★『山崎方代全歌集』から。戦傷で眼を悪くし、定職にはつかなかつたが靴職人だったことのある無頼派歌人。貧しい生活に終始した。革を柔軟にし、割れたりしないように水を塗る作業をしながら覚悟をきめたのだらうが、以降も自らの人生を放浪し、その精神の自由奔放さを多くの人に愛された。白でも黒でもいい、方代の仕上げた靴を見たいものだと思う。